

初恋を思うべし

南都明日香ふれあいセンター 犬養万葉記念館 NO.2 (2015年10月1日号)

みなさん、お元気ですか。

夏の終わりころから、明日香村でも梅雨の逆戻りかと思うくらい、よく雨が降りました。日本各地では大雨による被害が多発しており、報道を見るたびに心が苦しくなります。一刻も早く平穏な日々を取り戻されますよう、心からお祈り申し上げます。

さて、犬養万葉記念館もリニューアルオープンしてからそろそろ1年を迎えます。おかげさまで入館者も増え、犬養先生を慕って来てくださる方々がまだまだ多くいらっしゃることに感激でしたし、図書室の犬養蔵書も利用が増えました。館長の万葉講座や、犬養万葉100首を詠むシリーズの講座も始まり、展示だけではない発信にも努めています。

また、少しずつですがカフェの存在も知って頂き、この夏は看板のオムライス以上に「ひやしきつねうどん」が名物となりました。新たにできたホールでは、4月の若菜祭以降、井上真実さんの篠笛コンサートや、奈良の酒造会社5社のご協力を得て「万葉の酒を楽し



▲「光の回廊」が雨で点灯が中止になる中、記念館で独自に点灯を試みました。幻想的な世界になりました。

む」会などのイベントも開催され、恒例の「万葉の明日香路で月を観る会」は、犬養先生が始められた原点に立ち戻り、明日香村の方々とのふれあいや、万葉朗唱などを中心に今年はホールで宴のひとつときを楽しみ予定。今回でなんと48回目の観月会。二上の夕照と倉橋山からの昇月に思いを馳せます。そして11月からはホールにグランドピアノも加わります。ますますいろんな展開がありそうで、ワクワクしています。みなさまのご利用、ご参加をお待ちしています。

犬養先生の碑



飛鳥坐神社の石段下、右手の道路沿いに筆供養のために建てられた「筆塚」は、昭和52年に建立され、犬養先生の書によるもの。植樹された木が茂り今は見えにくくなってしまい、ちょっぴり残念です。



記念館歳時記



館庭に1本のそびえたつ「さるすべり」の木。初夏からライラックかと思えるほど、たわわなピンクの美しい花が咲き誇り、来館者すべての方が足を留め、カメラにおさめてくださいました。



通常どこでも見かける「おしろい花」ですが、なんと1枝に赤と黄の2色の花が咲くめずらしい品種。浜木綿や秋の七草に加えて、にぎわいが増しました!!

犬養孝先生が初めて飛鳥を訪ねたのは、第五高等学校の生徒の時だった。上田英夫教授の講義を聴いて、大学で『万葉集』を学ぼうと決意した。夏休みに熊本から東京の実家に帰る途中、毎年、辰巳利文氏が主宰する「奈良文化学会夏期臨地講座」に参加した。東京帝国大学進学後も参加は続いた。

辰巳氏は「犬養君をたたえる」（『万葉・その後—犬養孝博士古稀記念論集—』塙書房、1980）の文中に、第4回夏期臨地講座に参加した犬養先生の礼状を引用している。昭和5年8月9日消印の葉書に、「この度は、色々お世話様に相成り有難うございました。当麻寺で遅れて、お別れの挨拶の出来なかったのは、残念でございます。その後木曾川下り等をしまして帰京致しました。講習が終ってお疲れの事と存じます。西の京、吉野山、飛鳥等と愉快な見学の出来ました事、厚く御礼申し上げます。」とある。この年の4月に先生は大学に進学し、高校には4年間在籍していたので、先生からお聞きした述懐から判断すると、第1回の参加は高校2回生の時となる。「犬養万葉」の原点といえよう。

辰巳氏はこの夏期講座の2か月前に上京している。6月1日、東大赤門前の「鉢の木」で、歓迎会が森本治吉・藤田徳太郎・中島光風・石井庄司、東大生の犬養孝・森本健吉の6人によって催された。上記の文章にはその時の記念写真も掲載されている。東大生になったばかりの犬養先生は、2か月後に行なわれる臨地講座の詳細を、辰巳氏から直接聴き、東京から参加することを決意したのだろう。

先生の古稀（昭和52年4月1日）に遅れること3年、昭和55年5月25日に、上記の『万葉・その後』が漸く上梓された。改めて出版記念を兼ねた古稀記念会を関西では、この5月25日に大阪ロイヤルホテルで行なった。

この時、辰巳氏や近世商業史家の宮本又次氏（当時、大阪大学経済学部教授）も来賓として、スピーチされた。宮本氏もまた、旧制高校の生徒の頃から夏期臨地講座に参加していたという。その言葉を聞くと、犬養先生は「な〜んだ、君も来ていたのか。」と、ひときわ大きな声を発した。犬養・宮本のお二人の生年は同じ1907年。学年のズレはあるが、共に参加していた年があったのだ。恩師の辰巳氏を囲み、グラス片手に3人は、長い長い立ち話を続けていた。

宮本氏は御自分の祝賀会開催の度ごとに、非売品の私家版ブックレットを記念出版している。その中には旅の随想が数多く収録されている。現地踏査を大切に、経済史家の眼差しを感じさせられる。

犬養先生は万葉随想のなかで、たびたび辰巳氏の思い出に触れている。講義の声は「蛮声」「轟々たる大声」であったという。私は一度だけ「蛮声」講話を聴いた。昭和47（1972）年の甘樫丘でのお月見の会の時だった。琴の演奏などのアトラクションが続くうちに、日が暮れてきた。要所に配置された篝火に火がつけられた。犬養先生が「万葉の月」と題する講話をB5版1枚のレジュメ片手に始めると、待望の満月が音羽山にかかっていた雲の上から顔を出した。一同拍手、歓声。先生の20分ほどの話が終るや否や、辰巳氏がマイクを譲り受けて、飛鳥の大切さと昔の思い出を語り始めた。当日のプログラムには予定されていなかったが、話は延々と続いた。甘樫丘の下で待機していた村の実行委員は、一行がなかなか降りてこないで、何度もトランシーバーで丘の上の実行委員と連絡をとっていた。

閉会の辞のあと、各自に火のついた手作り松明が手渡された。足元を照らすためだったが、満月は空高く上っていたので、もうその必要はないほどだった。

これからの予定

- ・ 10月12日（月・祝）/ 11月5日（木）/ 12月17日（木）
13時～15時
シリーズ 岡本三千代館長講座（各1000円）
- ・ 11月28日（土）/ 1月16日（土） 13時半～15時半
「犬養万葉100首を詠む」城山健次副館長
（各1000円）
- ・ 12月 6日（日）
万葉植物野外講座（詳細未定）馬場吉久講師
- ・ 12月 6日（日） 14時～16時
「蓄音機の会～第九を聴く」
企画・協力 脇田名誉館長（500円）

新たな予定につきましては、順次ご案内させていただきます。また、昨年同様、年末年始はできるだけ開館致しますので、HPなどでご確認ください。



編集後記

- ★ 第13回「万葉の歌音楽祭」は、大和高田市の竹中信子さんが大賞を受賞。明日香の地に相応しい天武天皇の名歌をのびやかに歌唱されました。おめでとうございます。
また、今年設定された初の記念館賞を受賞された谷真由美さんは、つばいちホールでコンサートを開催する権利を獲得されました。今から公演が楽しみです。
- ★ 今年、岡本館長の万葉うたがたり活動の35周年記念事業が重なり、記念館に常駐できないことを申し訳なく思っております。在館はウェブサイトにて予定を掲載しています。